

【4班】（構成員：無藤部会長、齋藤委員、平川委員、牧田委員、吉田委員）

- アクティブ・ラーニングとは何ぞやというところから話し合いを始めた。それに伴って、二つ改善が必要であるという認識に立った。一つは、目標、評価の改善。もう一つは指導方法の改善。
- 社会と学校のつながりをどのように結びつけ、深めていくかが重要。具体的には、キャリア教育ということであったり、教室のみの世界にとどまらないというようなことであったり、あるいはファシリテーションであったり、あるいはコミュニケーション、プレゼンテーション、あるいはボランティアをベースとした教育の等視点から考えるとよいという意見があった。
- アクティブラーニングを取り入れるにあたって、学校文化をどう作り上げていくかがポイント。例えば、日本では文系・理系というふうに呼んでいるが、リベラルアーツとサイエンスをどういうふうインテグレーションしていくかということであったり、あるいはどのように多様性を認める文化を作って、異なった言語や文化と分かり合えるようなコミュニケーション能力を育成するか、などの視点が重要。それから失敗してもいいという文化をどのように学校の中で取り入れられるか、さらにポジティブなクリティカルシンキングを許容できるような文化をどういうふうに取り入れるか。文化の醸成が必要という議論があった。
- 方法論としては、ICTが非常に有効ではないかと思う。現実的には、学校現場では無線LANが使えなかったりすることもある中で、どういうふうICTを学校の中に取り入れていくのか、MOOCを学校の中に取り入れていくのか。
- 時間をどのように生み出すかということについて配慮していかなければならない。一つは「チーム学校」として、校内外のステークホルダーを見える化したり、あるいは役割を上手く分けていくのか、学校運営協議会等を活用した中で、どういうふう「チーム学校」を実現していくかという議論があった。
- カリキュラムマネジメントに関しては、単元全体のロングスパンカリキュラムを作ったり、あるいは基本中の基本ですがなかなか現実できていない「生徒」が中心の授業作りを行ったり、あるいは英語を全てのカリキュラムに入れるというような形でできないかとか、かなり新しい手法を用いたカリキュラムマネジメントが方策も必要なのではないかという議論になった。
- 最後に、広報と研修というキーワードを挙げたい。教員の研修に関しては、校内の研修のみならず、教育委員会を主体とした指導主事の育成、こういった形の研修の在り方も不可欠ではないかというこ

とがある。またアクティブ・ラーニングの進捗状況を校内外に広報していくことが、アクティブ・ラーニング実現に向けて必要なのではないかという議論になった。

※ 4 班資料



【1班】（構成員：荒瀬委員、上田委員、高木委員、渡瀬委員）

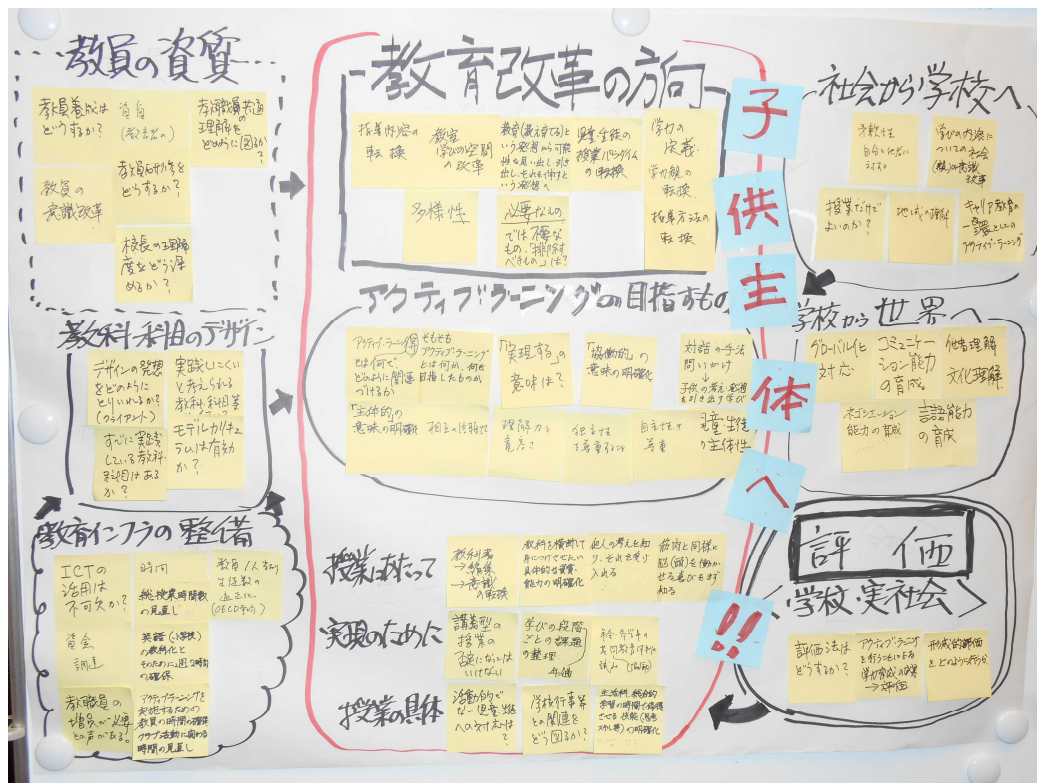
- 「学校から世界へ」ということを軸に、コミュニケーション能力、他者理解、異文化理解、ネゴシエーション、言語能力の育成などを学校で行うと、グローバル化の中でどのように広がっていくかということを考えた。一方、「社会から学校へ」ということで、今、社会から学校へ求められるものとして、柔軟性であるとか、学びの内容についての社会の意識改革、さらには地域との連携や、キャリア教育ということが必要だろうということとなった。

- 「子供主体へ」ということを考えると、まず、授業の具体から考えていくということが必要。児童生徒の対応をどうするかとか、学校行事をどうするかとか、生活科や総合的な学習の時間の中で、技能やそれから思考スキル等をどのように見ていくか。そしてその実現のためには、講義型の授業の否定だけにはならないようにしたい。さらには、学びの段階ごとの整理、教育の協働的体制をどのように試みていくか。そして、授業に当たっては、現行の教科書をどのように編集するか、それから教科書自体の考え方も変えたり、更には教科を横断させて身に付けたい具体的な資質・能力を明確にしたり、他者との関わり、また筋肉と同様に脳も動かすといったことで、そこから積み上げて、アクティブ・ラーニングが目指すものというのが出てくるということとなる。

- アクティブ・ラーニングを実現するための、教育インフラの整備については、ICTの活用の問題、それから教員の増員、アクティブ・ラーニングをするための時間の確保、さらには総時間数の問題や、児童生徒数の適正化などの整備をする中で、教科・科目のデザインをもう一度図っていくということが大事。アクティブ・ラーニングを実践しにくいと考える教科・科目はないか、モデルカリキュラムを示すことが本当に有効になるのか、モデルカリキュラムをまねて、それで終わりということにはないかどうかといったことも考えながら、全体のデザインを考えていく必要がある。そのデザインを考える中で、教員の共通理解を図り、教員養成・研修や意識改革、そして校長先生の理解度をどのように高めていくかということも問われると思う。

- 最後に、「教育改革の方向性」について。まず一番には、学力の定義。学力観が変われば、当然、指導方法も変わっていく。子供の立場からいえば、児童生徒の授業の捉え方、授業パラダイムそのものをどういうふうに転換していくか。それを考える上では、今まで必要だったものとそうでないものとの精査も必要になってくる。そのような、教室という学びの空間が、今までと同様であっていいのかということも考え、多様性を含めて、教育全体の問題を考えていこうと考えた。

※ 1 班資料



【2班】（構成員：天笠委員、今村委員、松川委員、三浦委員）

- このグループの議論のポイントは二つ。一つは、この改訂は何のためにやるのかということ。その理念が伝わるということが一番大切にすべきで、アクティブ・ラーニングとか方法論は、その後、開発されていくけれども、時代的な背景も含めて、理念がどうしたら隅々まで伝わるのかということについてということが一番の論点。二つ目は、その理念が伝わった上で、どうしたら校長先生をはじめとした先生方のカリキュラムマネジメントが充実していくのかということ、そして、そのために社会がどんなリソースを学校や先生方に対して提供すれば、先生方を支援することができるのかということ、そんな形で、改訂の理念について、そしてカリキュラムマネジメントについてというところが、議論のポイントであった。
- どのように今回の改訂の理念を伝えていくのかというところでは、旧来型の校内研修を脱皮して、学校の中で校内研修こそアクティブにして、どうしたらこの理念を全ての先生方が腹落ちするように伝えることができるのかということを検討した結果、熟議型、対話型で先生方が腹を割って話せるような校内研修を学校で行い、その教材として、この学習指導要領が使われてはどうかという話になった。もしかしたら議論のたたき台としての指導要領かもしれないなと思っている。総則の部分にも、背景や思いが分かりやすく明記されていることが大切だという観点も出た。
- アクティブ・ラーニングの充実ということとカリキュラムマネジメントというのは、ある意味、重なり合うということで、その要件として、授業の方法の改善や、ICTの導入、あるいは特別な配慮を要する子供たちへの対応、そういう整理の仕方の位置付け、更には評価の改善。これらは校長先生を中心とした先生方、校内における先生方の協働を通して実現されるものであり、改めて校長先生のリーダーシップの必要性と大切さということを挙げた上で、その校長先生を中心とした先生方に対して、どうリソースを充てていくのかということを中心に検討した。
- 教育委員会からの支援として、キーパーソンとなる指導主事については、今回求められているような教科を横断したようなカリキュラムマネジメント、あるいはカリキュラムデザインができるようになるためには、それを指導できる指導主事が要るが、従来指導主事は、授業が得意な英語なら英語、数学なら数学の人がなっており、現実にはなかなか難しい。ただし、今、新しい試みとして、スーパーグローバルハイスクールとか、スーパーサイエンスハイスクールとか、スーパープロフェッショナルハイスクールなどで、新しいカリキュラムに取り組んでいる方たちの中から、将来、優秀な指導主事が出てくるのではないかというふうにも思っているし、また、その養成の段階、研修の段階での改革が必要であろうと思う。教員養成部会との連携も必要。国の教員研修センターにおいても、指導主事の育成について取り組んでほしい。

○ 校長先生の力、そして指導主事の先生の力をきちんとサポートして引き出していくような仕掛けが必要であるということと、さらにチーム学校の議論で出ているような専門家の方々と、また地域の保護者の方々、首長、そして産業界の皆さんとも一緒に、この学習指導要領の改訂の理念を熟議するような研修会があっても、本当の意味で伝わっていくのではないかという話も出た。

○ また、最終的には、やはり学校は財源があって、人がいてというところが大切である。

※2班資料

